

函館ワンニャン物語 ⑮ ～東日本大震災 2～

◆館岡家自宅（湯浜町）

急いで帰宅した洋一は、二階に行く。  
二階では、茫然と海を見ている聖子がいる。

洋一「何やってるんだ。すぐに避難するぞ！」

聖子「できない……。」

洋一「できないって、何言ってんだ！」

聖子「できない、犬と猫を置いていけない……。」

洋一「置いていけないって言っても、犬5頭、猫四十三匹、どうやって連れて行くんだ。そんなの無理だ。」

聖子「だから、行けない。避難できない。」

洋一「避難できないって、津波に飲み込まれたらあつという間に終わりだぞ！」

聖子「私は、残る。ここに、この家に。」

洋一「お前、何言ってんだ！死ぬぞ。死んでしまうぞ。」

聖子「でも、私残る。」

聖子は、黙って海を見ている。  
その聖子の目を見て、洋一は聖子と初めて出会った日のことを思い出す。

◆函館市民会館噴水前（回想）

昭和四十九年八月十四日、洋一と聖子が初めて出会った日。

友達のことと相談したいということで、前日に聖子から洋一に電話をかける。

そして、次の日の午後三時に市民会館噴水前で会う約束をする。

その日、噴水の前に洋一が行くと、黄色いワンピースを着た女の人が近づいて来る。

聖子「館岡洋一さんですね。」

洋一「はい、そうですが」

黄色いワンピースが眩しい。

洋一は、その時の聖子の姿を今でもはっきりと覚えている。

聖子「昨日、電話をかけた者です。友人の白田さんのことで、相談があります。」

洋一「白田さんて、うちの高校（函館中部高等学校）の後輩の城田さんのこと？」

聖子「そうです。」

洋一「それで、どんな相談？」

これが、洋一と聖子の初めての出会いである。

洋一が十八歳、聖子が十七歳の夏である。

この日から三十七年間、洋一と聖子と一緒にいる。

洋一は、聖子の性格をいやというほど知っている。

こうと決めたら、絶対に引かない性格であるということ。

◆館岡家自宅二階

洋一は、覚悟を決めた。

洋一「わかった。残ろう。犬と猫といっしょに、ここに。」

聖子「……………」

洋一「そうと決まれば、まず猫小屋の猫をここに運ばなくちゃ。二階の方が、少しでも助かる可能性がある。聖子は、一階の猫を頼む。」

聖子「わかったわ、ありがとう。」

洋一は、猫小屋の猫十八匹を連れてくる。

続いて、犬5頭。二階は犬と猫であふれている。

洋一と聖子は、5頭の犬を見る。

ラブ、クロ、ボン吉、ジョイ、タロ吉。

続いて、猫に視線をやる。

交通事故から復活したボン太がいる。

日吉が丘で保護したダニー、ミッシェル、キミー、プリン、ラン、マーちゃんがいる。

旭岡で保護したナナがいる。

保健所から引き取ったタマ、シン、夢、シロ、マミー、ネネ、ココ、ララ、モコがいる。

アニマルレスキューから預かっているチビ、ゴハンマロン、リボン、小太郎、小次郎、ルナ、鉄がいる  
そして、我が家で昔から飼っている豆、銀、プー、金太、くり坊がいる。

新入りの猫たちの顔も……………」

飼っている全部の犬と猫を二階に上げ終わり、洋一は黙って海を見る。

洋一「犬と猫の命は平等だけど、その一生は出会った人

間で決まるって誰かが言っていた。聖子と出会った犬と猫は、幸せだよな。俺もだけど……。」

海の水が、はるか沖まで引いている。  
外からは、緊急車両による避難勧告が聞こえている。

自らの財産と労力と時間を費やし、保健所で殺処分寸前の犬、猫を助ける活動続ける、館岡家族。

人情味あふれる優しき町「函館」、その片隅で動物にも献身的に愛を注ぐ家族がいた。

その家族が、東日本大震災の日に選んだ道とは。

人間のエゴに、動物愛護の精神から、自らの行動で立ち向かう家族の姿を通して、あなたに問いかける。

## 終わり

最後まで読んで下さった皆さま、どうもありがとうございました！

いかがでしたでしょうか？

いつも躊躇なく動物たちを保護しているこのメンバーご夫妻に、こんな葛藤や覚悟があったとは。

私もこのシナリオを読むまでよく分かっていませんでした。

動物を飼うことはもちろん、保護するということも、その命を預かるということ。

中途半端な心構えではしてはいけないのだと実感しました。

また、最近では日本中で自然災害が多発していますので、もしもの時のことを家族で考えておくことも重要ですね。

お話は「みらい」発足の一年ほど前で終わっています。

まだまだ色々なドラマがあるそうなので、またいつの日かご紹介できればと思っております。